

使徒言行録講2 1章15-26節,
『仕える自由』

パウロという人は外国で生まれた人ですが生粋のユダヤ人でした。ユダヤ教の教えを忠実に守り、律法を守ることに於いて熱心で、神を信じる信仰者としてパウロは成長しました。彼はユダヤ教ファリサイ派に属する人で、このグループの人たちは、ユダヤ教の中でも律法を守ることにことのほか熱心な人たちでした。

彼の60数年の生涯の前半生、前半分はまさにユダヤ教ファリサイ派の信仰者としての歩みでした。そのパウロがイエス・キリストとの出会いによって転換を経験するのです。その転換は生き方の変更というようなものではなく、神と自分との関係、自分という存在そのものの受け取り方の転換、いわゆる回心でした。今までユダヤ人であることの誇り、つまり神に選ばれてある自分だということと、自分の律法への熱心、まじめさで、救いに与ることができると思っていたパウロが、それは救いにとって取るに足りない、いやむしろ、そういう自分の熱心で人は救われるのではない、ということをもっとも気づかされていくのです。そもそも人は、自分の熱心とかまじめさではどうにもならない罪がある。わたしたちが救われるのは、ただイエス・キリストの十字架と復活によるのだ、キリストの信実によるのだ、ということを知っているのです。それは彼が幼い時から30年以上ユダヤ教ファリサイ派の一人として熱烈な信仰者として歩んできたことを全く覆す福音の知らせでした。

したがってパウロは、救いの条件としてユダヤ人たちが行っていた割礼を受けることや、律法を守ってユダヤ人と同じような生活をする必要はない、と異邦人に向かって語ったわけです。ただキリストの信実によって救われる、と説いたのです。

パウロのこのようなキリスト教信仰はユダヤ人キリスト者になかなか受け入れられませんでした。それはある意味当然すぎるほど当然のことでした。ユダヤ人にとって律法を守るとか、割礼を受けるということは、自分たちの在り様をもっとも深く規定しているものだと思っていたでしょうから。なかでもユダヤ人キリスト者の中心であったエルサレム教会においては、そのようなことは到底容認できることではなかった。エルサレム教会の人たちは、ユダヤ人の誇り、律法への熱心、割礼を受けることは、イエス・キリストと出会った後もき

わめて重要なことだと受けとめていました。そのことは彼ら彼女たちの先祖たちから受け継いできた最も大事なことでした。ユダヤ人キリスト者にとって主イエスは、まさしくユダヤ人の救い主なのであり、異邦人というのは、割礼を受け律法を守ってユダヤ人になることで救われると思っていたのです。

一方パウロは、ユダヤ人であろうが、ギリシア人であろうが、イエス・キリストの福音はキリストのまことによって誰にでも、与えられる、ということを感じて、ユダヤの伝統から自由になっていました。だからこそ、彼は異邦人伝道にあれほど邁進することができたのです。パウロは異邦人たちの間でユダヤ的な伝統に縛られずにキリストの福音を大胆に語った。

しかし当然のことですがこうしたパウロのことが理解されない以上、エルサレム教会とパウロの間はぎくしゃくせざるを得なかったでしょう。ぎくしゃくというよりも、エルサレム教会からすれば対決せざるを得ない、と言った方がいいかもしれない。だからこそ、パウロが三回目の伝道旅行を終えて、エルサレムに行くと言い出した時、周囲の人たちは反対したのです。

パウロとエルサレム教会との考え方の違い、衝突は明らかでした。

しかしパウロは「それならそれでいい、エルサレム教会はユダヤ人だけで勝手にやればいい。わたしはわたしで異邦人の教会で勝手にやる。」という考え方ではありませんでした。むしろ彼はエルサレム教会と異邦人教会との関係を誰よりも積極的に、どうしても必要な関係とみていました。

パウロがエルサレムに到着するとエルサレムにいるキリスト者たちは彼を喜んで迎え入れてくれました。そして翌日、パウロはヤコブを訪ねました。ヤコブはイエス・キリストの実の弟で、この時すでにかつてのエルサレム教会の指導者ペトロに代わり、エルサレム教会の中心の指導者となっていました。そしてこのヤコブをはじめ教会の長老たちがユダヤの伝統に堅く立つ人たちだったのです。

「兄弟よ、ご存知のように、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています。この人たちからあなたについて聞かされているところによると、あなたは異邦人の中にいる全ユダヤ人に対して、『子どもに割礼を施すな。慣習に従うな。』と言ってモーセから離れるように教えているとのこと。いったい、どうしたらよいでしょうか。彼らはあなたの来られたことをきくと耳にします。」

ヤコブをはじめ長老たちはパウロが外国でユダヤ人たちに子どもに割礼を施すな、とか、ユダヤの伝統に従うな、と言っている、これがみんなの耳に入っ

たら危険だ、というのです。パウロの身を案じているようにも聞こえますが、ヤコブたち自身がパウロの律法を軽視するような発言を容認できないのです。容認するどころか、そんな発言は断じて許せないのです。実際パウロの手紙には、ヤコブたちからすれば、律法軽視ととれる言葉が多く語られていたのです。

ヤコブたちはそこで一つの提案をします。「わたしたちの中に誓願を立てたものがあります。この人たちを連れて行って、一緒に身を清めてもらい、彼らのために頭をそる費用を出してください。そうすれば、あなたについて聞かされていることが根も葉もなく、あなたは律法を守って正しく生活している、ということがみんなにわかります。」誓願を立てる者たちと一緒に身を清めてほしい、そしてその費用を全部負担してほしい。そうすればあなたが律法を厳守している証拠になる、というのです。よくわからないのですが、ここにはエルサレムに住むユダヤ人キリスト者に対するパフォーマンスというか、パウロも律法には忠実なんだというデモンストレーションをしてほしい、というヤコブたちの願いが込められていたのでしょうか。

そしてもう一つ、実はパウロがエルサレム教会のために集めた献金のことがここには全く出てきません。おそらく、エルサレム教会は、異邦人教会からの献金を受け取ることを潔しとしなかったのではないか。律法を守らず、割礼もうけていない人々から献金を受け取ることは、エルサレム教会のユダヤ人たちの中で、かなりの抵抗があった。それで、頭を剃る費用（これは散髪代程度のものではなく、高額な費用）を負担する形で異邦人教会の献金を受け取ったのではないか。つまりエルサレム教会としては、頑固なまでに自分たちの伝統に堅く立ちたいのです。

それに対して、パウロはヤコブたちの提案をあっさりと受け入れ、四人と一緒に清めの儀式を受け、献金も費用として払う形で納めていくのです。

パウロはイエス・キリストの信実による信仰に生きるものとされて転換した。ユダヤの律法からも割礼からも自由。にもかかわらず、彼はここでヤコブたちの提案をいともあっさりと受け入れている。「ああ、いいですよ。律法を守ることが必要なら、守りますよ。」という感じです。

パウロは、相手に調子よく合わせて節操なくある時は右、ある時は左、と言っているわけではない。パウロはガラテヤの信徒への手紙で、こういうことを言っているのです。あえて直訳で引用すると、「キリスト・イエスにあるならば、割礼にも無割礼にも何の意味もなく、むしろ、愛を通して働くまこと・信実こ

そが大切だ。」イエス・キリストの信実を活かされているのならば、割礼を受けているからいいとか、逆に割礼を受けてないからいい、というようなことは無意味。大事なことは割礼を受けているかいないということではなく、キリストの愛によって与えられるまことなのだ。と言っている。これから割礼を受ける人に、別に必要ないよ、とパウロは言ったでしょう。逆に割礼を大事にしてきた人たちに、割礼を授けたこともあった。キリストの信実からすれば、どうでもいいこと。どうでもいいことであることを知ったうえで、相手の文脈の中でいねいに寄り添い考える。相手に仕える。それは相手に迎合することとは似て非なること。また同じガラテヤの信徒の手紙の中でこうもパウロは言います。「割礼にも無割礼にも何の価値もありません。価値があるのは、新たな創造です。」普通に言えば相対化ということです。どちらも大して意味はない。どうでもいい。しかしそのどうでもいいことにキリストのまことによって新たに創造された者としてその都度コミットしていく。相手に仕えながらかわるのです。コリントの信徒への手紙の中でパウロはこう語る。「わたしは、いかなる人に対しても自由であるが、自らすべての人の奴隷となった。より多くの人を勝ち得るためである。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。(省略)福音のためなら、わたしはどんなことでもします、それはわたしが福音に共にあずかるものとなるためです。」自分が正しいから自分の生き方に固執する、自分の我を通す、というような生き方ではわからない世界がここに 있습니다。実際に、迎合ではなく、福音のために、ユダヤ人に対してはユダヤ人のようになる、というわが身の出来事としてしてみなければわからないものがここにある。

仕える自由、ということをかみしめ、かみしめていきましょう。